

# 小淵沢町竹原遺跡

— 県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1988

峠北土地改良事務所

小淵沢町教育委員会

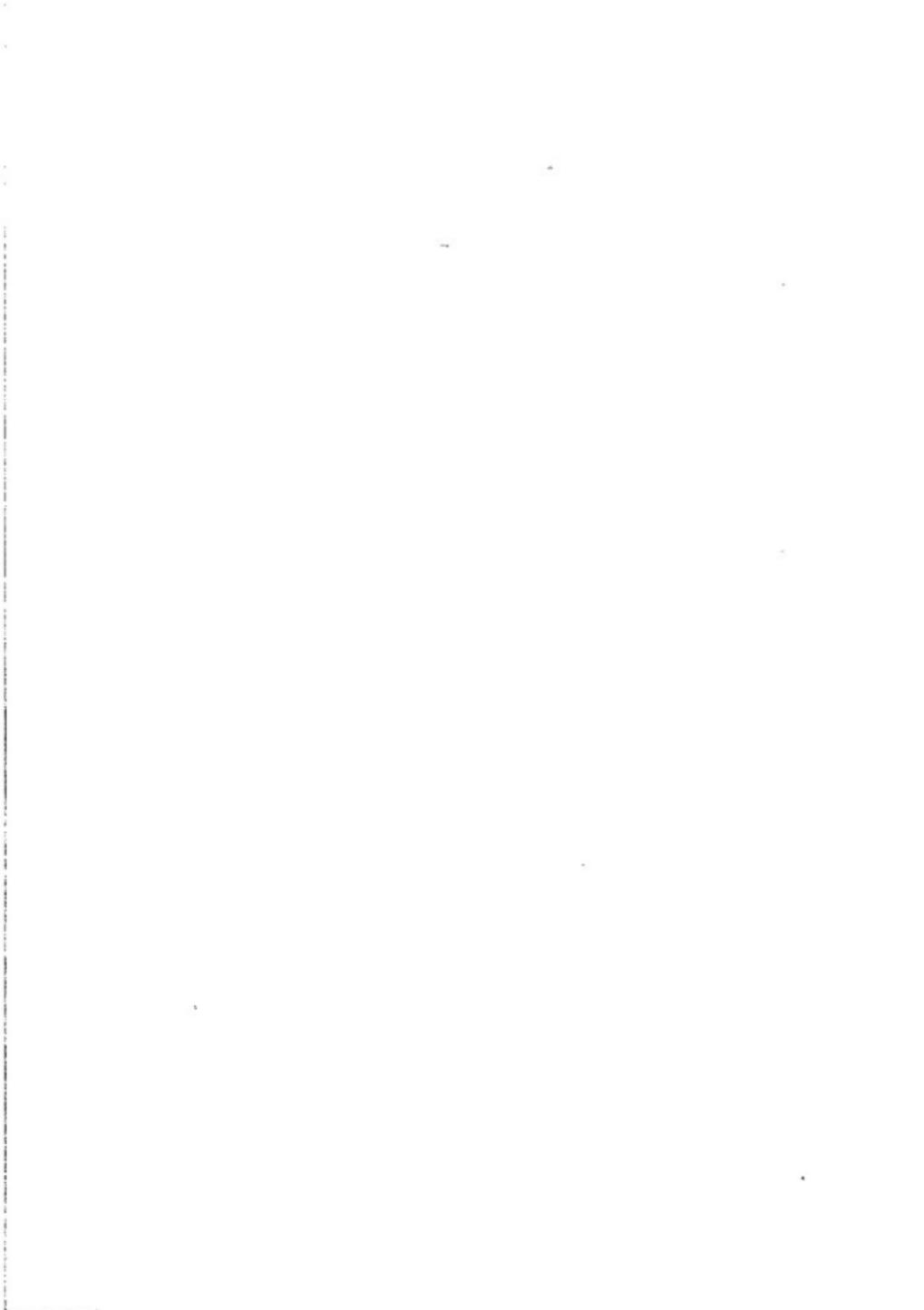
# 小淵沢町竹原遺跡

— 県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1988

峡北土地改良事務所

小淵沢町教育委員会



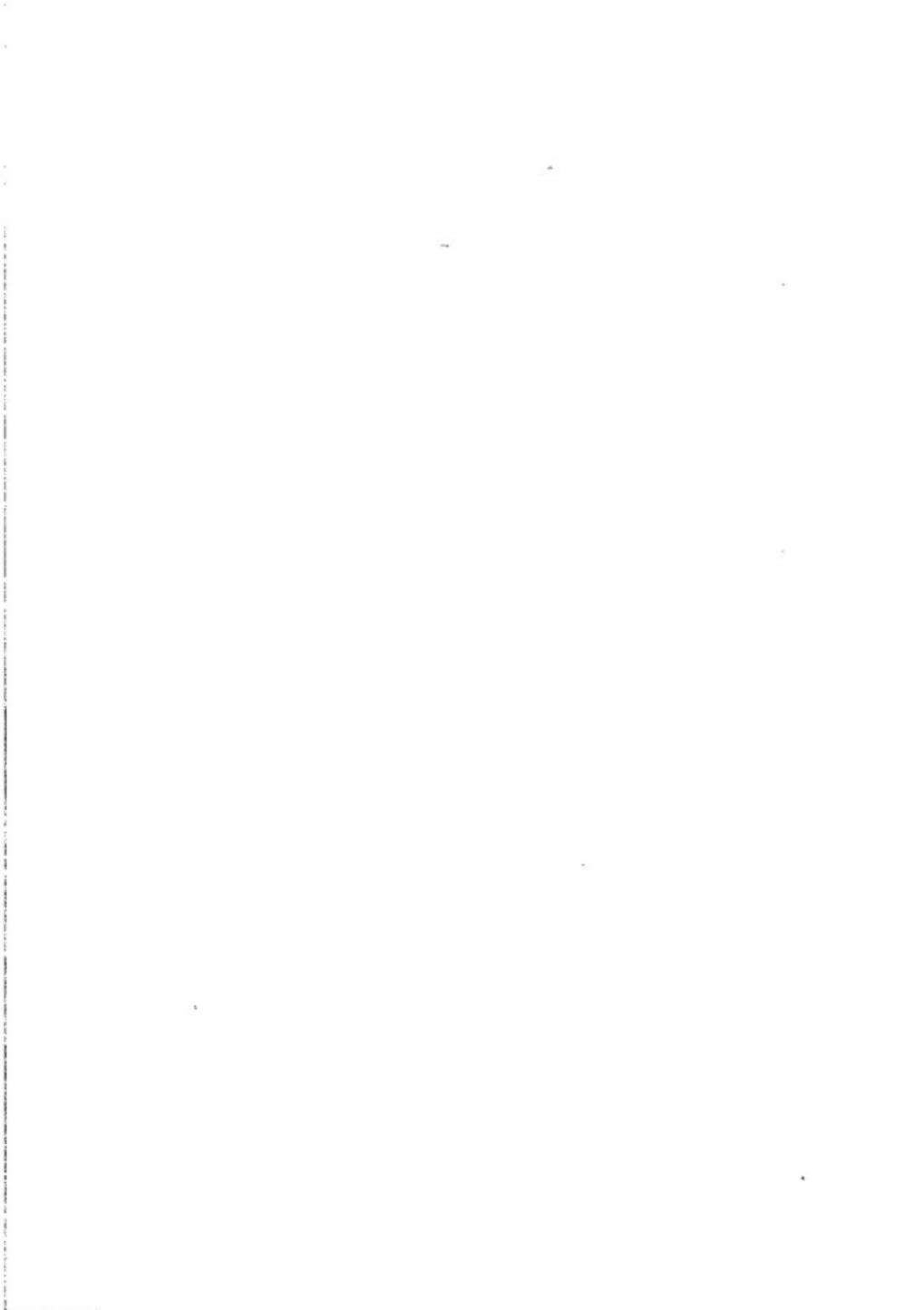
## 序 文

小淵沢町では、豊かな自然と調和した文化的な町をめざして、各種事業を行ってまいりました。特に、農地の土地整備を整備し、経営の近代化により農業振興をはかるため圃場整備事業を実施しております。小淵沢町教育委員会では、圃場整備事業に伴って昭和57年度より埋蔵文化財の発掘調査を行っています。昭和62年も昭和61年に引き続き久保地区の県営圃場整備事業の工事に先立って、竹原遺跡の発掘調査を行いました。その結果山梨県内でも数少ない貴重な平安時代の鍛冶遺構が発見されました。竹原遺跡の報告書を刊行するにあたり、本書が学術的な資料としてはもとより、多くの方々の文化財に対する理解と保護の一助になれば幸いです。最後になりましたが、発掘調査、報告書の作成について終始御指導を賜りました、山梨県教育委員会文化課、岐北土地改良事務所、小淵沢町土地改良区の関係各位に感謝の意を表します。

昭和63年3月31日

小淵沢町教育委員会

教育長 清水金富



## 例　　言

1. 本書は、小淵沢町久保地区県営圃場整備事業に伴う竹原遺跡の発掘調査報告書である。
2. この調査は、岐北土地改良事務所との負担協定により、文化庁、山梨県の補助金を受けて小淵沢町教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査は、昭和62年6月1日から昭和62年8月31日まで実施した。
4. 本書の編集は、佐野勝広が行った。
5. 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の方々に御助言、御協力を頂いた。記して謝意を表す次第です。  
　　柳原功一（山梨文化財研究所）、坂本美夫（県埋蔵文化財センター）、清水博（柳形町教委）、新津健（県教委文化課）、山路恭之助（須飞町教委）
6. 発掘調査により出土した遺物は町郷上資料館、記録図面及び写真等は小淵沢町教育委員会において保管している。
7. 発掘調査組織　　調査主体　　小淵沢町教育委員会  
　　　　　　　　調査担当　　佐野勝広（小淵沢町教育委員会）  
　　　　　　　　調査事務　　坂本重夫（小淵沢町教育委員会社会教育係長）  
　　　　　　　　浅川あつ子（小淵沢町教育委員会主任）  
調査参加者  
　　小林恒子・坂井ふじ・進藤美恵・進藤みやじ・三井ちか代

## 目 次

1 発掘調査に至る経緯と経過	7
2 遺跡の環境と立地	8
3 遺 構	11
4 出 土 遺 物	17
5 ま と め	27

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	9
第2図 遺跡全体図	10
第3図 第1号住居址実測図	12
第4図 第2号住居址実測図	14
第5図 第3号住居址実測図	15
第6図 鎌冶址実測図	16
第7図 鎌冶址実測図	16
第8図 第1号住居址出土遺物	19
第9図 第2号住居址出土遺物	20
第10図 第2号住居址出土遺物	21
第11図 第2号・3号住居址出土遺物	22
第12図 鎌冶址出土遺物	23
第13図 鎌冶址出土遺物	24
第14図 鎌冶址出土遺物	25
第15図 鎌冶炉址出土遺物	26

## 図 版 目 次

図版1 遺跡近影
図版2 第1号住居址
図版3 第2号住居址
図版4 第3号住居址
図版5 鎌治址
図版6 鎌治炉
図版7 第1号住居址出土遺物
図版8 第2号住居址出土遺物
図版9 第3号住居址出土遺物
図版10 鎌冶址出土遺物
図版11 墓書

## I 発掘調査に至る経緯と経過

小淵沢町では、豊かな自然と調和した機能的な町をめざしており、道路の整備、農業の近代化、社会教育施設の整備を進めている。特に、農業構造の改善をはかるため近代化をおし進めしており県宮闈場整備事業を昭和55年より導入している。この事業に伴って昭和57年より埋蔵文化財の発掘調査が実施されている。昭和62年度は、小淵沢町久保字竹原を中心とする約5haが圃場整備事業の対象となった。そこで、小淵沢町教育委員会では、昭和61年12月に試掘調査を実施した。その結果、平安時代の遺構・遺物が認められたため、山梨県教育委員会文化課・峠北土地改良事務所・小淵沢町教育委員会の3者で協議を行い、記録保存を前提に発掘調査を実施することになった。発掘調査は、事業主体の峠北土地改良事務所より小淵沢町教育委員会が委託をうけて行った。調査は昭和62年6月1日より開始し昭和62年8月31日まで行い、出土品等の整理作業は、昭和62年9月17日から昭和63年3月末日まで行った。

### 発掘調査の方法

発掘調査の方法は、調査対象地内の表土を車機により排土した後人力により順次遺構確認面まで掘り下げた。磁北を基準に調査区の全域に10m四方のグリッドを設定し、北から南へ1-6列、西から東へA-F列と呼称した。

### 層序

#### 畑

第1層 耕作土（茶褐色土）

第2層 ソフトローム

第3層 ハードローム

#### 水田

第1層 耕作土（茶褐色土）

第2層 床土（赤褐色土、鉄分が多く含む）

第3層 黒褐色土

第4層 ソフトローム

第5層 ハードローム

## II 遺跡と環境と立地

北巨摩郡の北部に位置する小淵沢町は、八ヶ岳連峰の権現岳を頂点とする南西傾斜の広大な台地にあり東西約7km、南北約15kmで総面積3426kmの町である。

標高2400m以上は岩が露出している。標高1100m以下の地帯は緩やかな斜面が続き、深い谷間からでている河川と湧水を利用して、耕地が拓けている。竹原遺跡は、町中央部より西寄りに位置し、付近には北約500mに中央高速道路小淵沢インターがあり西には清里方面へ至る八ヶ岳公園道路が走っている。遺跡は、久保台地のやや中央部で標高860m前後に立地している。調査前の現状は畑地と水田である。

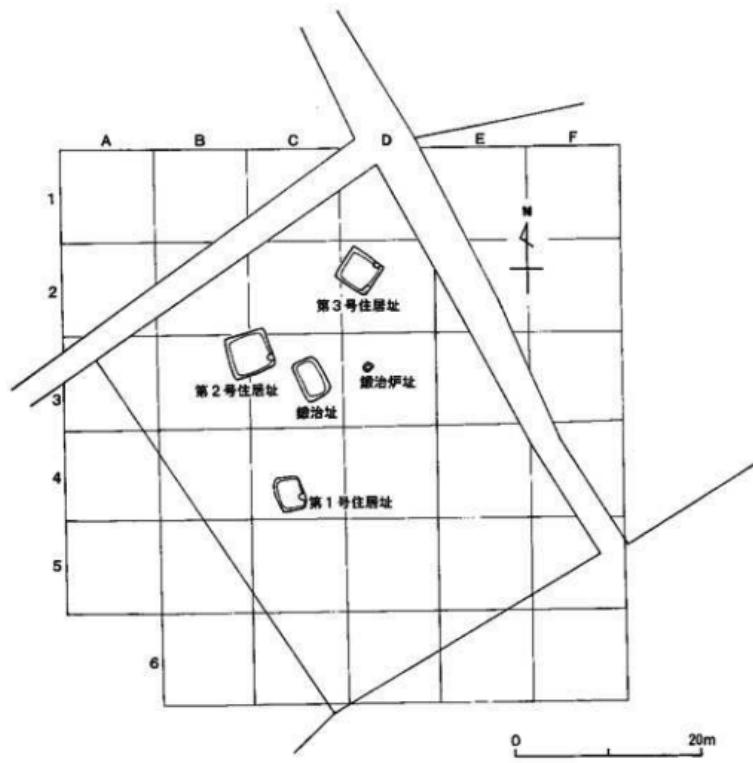
小淵沢町には、縄文時代と平安時代の遺跡が数多く存在する。昭和53年に行われた埋蔵文化財の分布調査の結果67ヶ所にのぼる遺跡が確認されている。時代別にみると、先土器時代2ヶ所、縄文時代67ヶ所、古墳時代、奈良時代なし、平安時代25ヶ所となり最も多いのが縄文時代であり、特異なのは古墳時代、奈良時代で現在のところ遺跡は発見されていない。これらの中既掘の遺跡は、縄文時代中期の中原遺跡<sup>註1</sup>、沢の田遺跡<sup>註2</sup>、平安時代の堅穴住居6軒検出した上平井出遺跡<sup>註3</sup>、堅穴住居10軒検出した前田遺跡<sup>註4</sup>、石上り遺跡<sup>註5</sup>、今回調査を行った竹原遺跡の6遺跡である。今後はなお急速な開発に伴って発掘調査が急増すると思われる。

- 註1 末木 健他 1974 「中原遺跡」  
山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
- 註2 佐野勝広 1984 「沢の田遺跡」  
小淵沢町埋蔵文化財報告書第2集
- 註3 末木 健他 1974 「上平井出遺跡」  
山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
- 註4 佐野勝広 1985 「前田遺跡」  
小淵沢町埋蔵文化財報告書第3集
- 註5 佐野勝広 1987 「石上り遺跡」  
小淵沢町埋蔵文化財報告書第5集



第1図 遺跡位置図

- |             |              |              |
|-------------|--------------|--------------|
| 1 竹原遺跡（平安）  | 2 上前後沢遺跡（縄文） | 3 下前後沢遺跡（縄文） |
| 4 岩座遺跡（縄文）  | 5 上宮原遺跡（縄文）  | 6 上井詰遺跡（縄文）  |
| 7 中原遺跡（縄文）  | 8 宗高遺跡（縄文）   | 9 石上り遺跡（平安）  |
| 10 加室遺跡（縄文） | 11 高野遺跡（縄文）  | 12 天神宮遺跡（縄文） |



第2図 遺跡全体図

### III 遺構

#### 豎穴住居址

##### 第1号住居址

本住居址は、調査区の南隅、鍛冶址の約10mの地点に位置している。プランは、東西4.3m、南北4mの隅丸方形を呈す。主軸方向は、N-78°-Eである。床面はロームと白色粘土を混ぜてあり非常によく踏み固められ遺存状態は良好である。柱穴は東壁の中央部下にみられ、径20cm、深さ30cmを測る。壁は確認面より約60cmを測りほぼ垂直に立ち上がる。周溝は各壁の直下にあり幅5cm-20cm、床面からの深さ5cm-10cmである。住居址の中央に鍛冶炉が検出された。炉は東西150cm、南北130cmの不整円形を呈し、床面からの深さは30cmである。全体に赤く焼けており、北側に径50cmのピットがみられ、ピットは炉より一段高く掘られている。炉が赤く焼けているのにたいして本ピットは焼けておらず、炉との位置関係から羽口を固定していたピットと考えられる。

炉内には安山岩の平石がみられ、石の表面は剥離痕が残り、鉄分が付着し赤色に焼けていることから金床石として使用されたものである。カマドは東壁中央に構築され、全長120cm、幅70cm、炊口幅55cm、煙道部は壁より10cm程外へ出ている。袖は平石を一列に並べて、白色粘土とロームによって補強している。

##### 第2号住居址

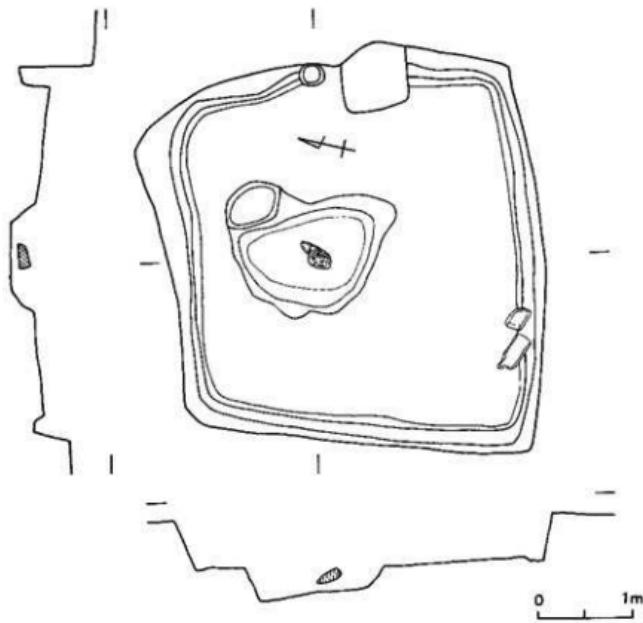
本住居址は、鍛冶址の西に位置している。プランは東西4.6m、南北4.5mの隅丸方形を呈する。主軸方向はN-72°-Eである。床面はロームと黒色土を使用し、貼り床としている。柱穴は検出されなかった。壁は床より緩やかに立ち上がり、壁高は20cm-35cmを測る。周溝は東壁の一部と北壁側に認められ、幅15cm-30cm、深さ10cmのU字形を呈する。カマドは東壁の南寄りに構築され全長100cm、幅130cm、炊口幅35cmで、壁のラインより6cm外へ出ている。袖は白色粘土とロームにより平石を補強している。全体に遺存状態は悪い。

##### 第3号住居址

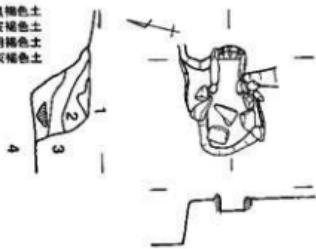
本住居址は、第2号住居址の北約10mに位置している。プランは東西4.3m、南北4mのやや不整隅丸方形を呈する。主軸方向はN-39°-Eである。床面はロームを若干掘り込んでいる。壁は全体に傾斜をもって立ち上がる。壁高は20cm-35cmを測る。柱穴・周溝共に認められない。カマドは北壁の東隅に構築され、全長120cm、幅100cm、炊口幅120cmで煙道部は5cm程外へ出ている。袖は痕跡のみ検出された。

##### 1 鍛冶址

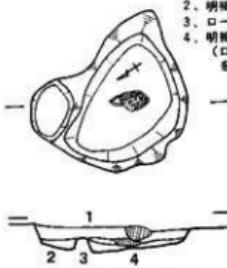
本遺構は、第2号住居址の西側2mに位置している。遺構のプランは隅丸の長方形を呈しており、東西2.5m、南北4.1mを測る。柱穴は検出されなかった。壁は床より緩やかに立ち上がり、



1. 黒褐色土
2. 茶褐色土
3. 明褐色土
4. 灰褐色土



1. 黒褐色土  
(ローム、堆土を含む)
2. 明褐色土
3. ロームブロック
4. 明褐色土  
(ローム、白色粘土焼土  
を多く含む)

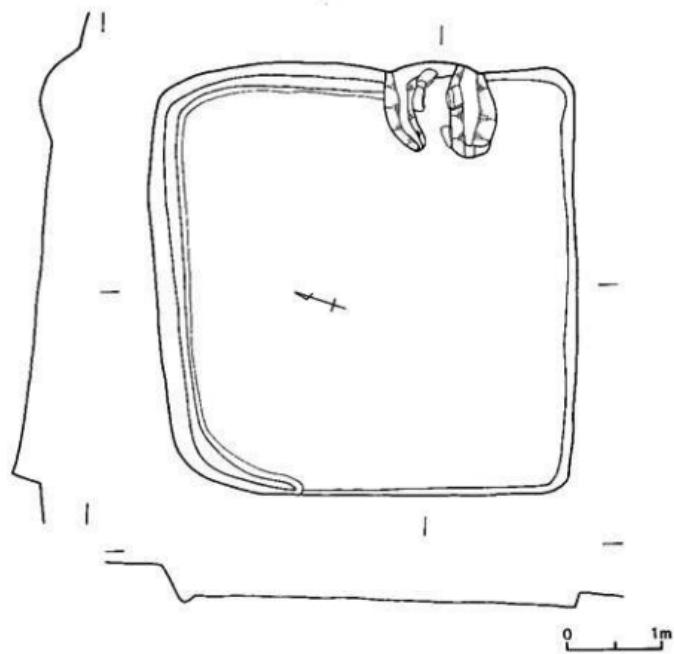


第3図 第1号住居址

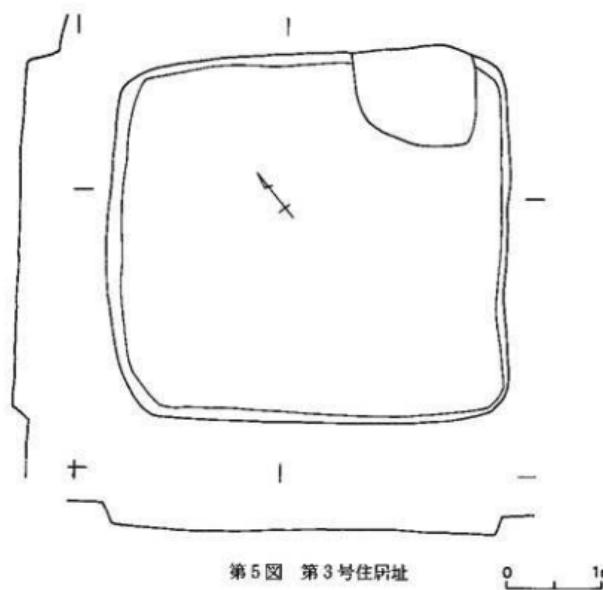
ているが、西側で残りが悪い。壁高は30 cm—50 cmを測る。床面はロームと白色粘土を使用しているが意識的な貼床は行っていない。南壁の西コーナーに径50 cm—60 cm、深さ40 cmの不整円形ピットが検出された。ピット内からは径10 cmの羽口が出土している。覆土は黒褐色を主体とした土と、ロームブロックの混った土で、炭化物、鍛造剝片が多く検出された。出土遺物の出土状況は遺構全体から、鉄滓が出土しており、中には橢形滓や、鉄塊、鉄片などがみられる。羽口も中央より南側中心に多く出土している。

## 2 鍛治炉址

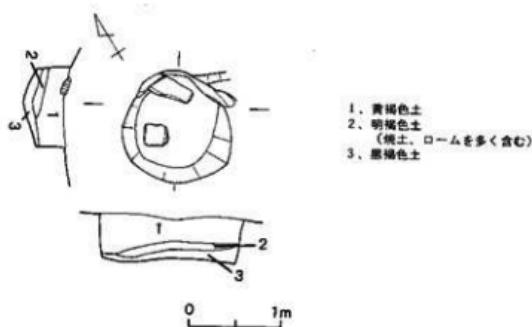
本遺構は、鍛治址の東側4 mに位置している。プランは東西 0.8m、南北 0.8m、深さ70 cmを測り、不整方形を呈する。炉の周囲は赤褐色に焼けており、炉内の壁は還元されて青灰色になっていた。壁は底より比較的垂直に立ち上がっている。覆土は上部において黒色土を主体としてロームブロック、焼土、炭化物、小鉄滓を多く含む。出土遺物は羽口、鉄滓がある。鉄滓は床面から覆土中にかけて、橢形滓、不定形滓が多量に出土した。



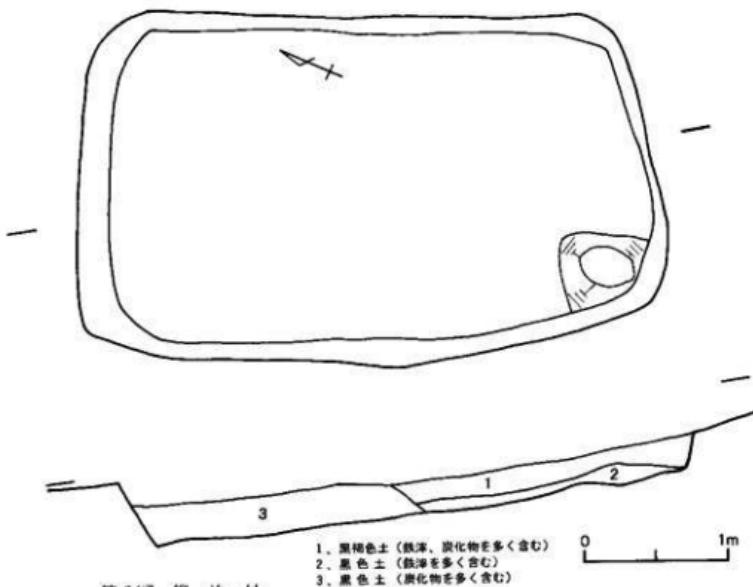
第4図 第2号住居址



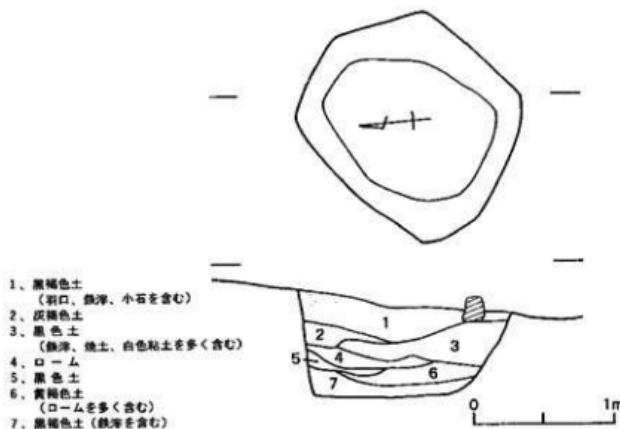
第5図 第3号住居址



カマド



第6図 錫治 址



第7図 錫治炉 址

## IV 出 土 遺 物

### 第1号住居址出土遺物（第8図）

1は、推定口徑14 cmの壺形土器である。内外共に茶褐色を呈し、外面にヘラケズリが見られる。2は、推定口径16 cm、内外面共にナデ調整が施されている。色調は内面赤褐色、外面黄褐色である。3は、底径 5.8 cm、の壺形土器である。外面と底部にヘラケズリが見られる。4は、推定口径14 cm、器高 3.5 cm、底径 7.4 cmを測る須恵器の壺形土器である。色調は内外共に赤褐色を呈する。5は、推定口径15 cm、器高 3 cm、底径 7.4 cmの皿形土器である。内面は黒色研磨、外面は茶褐色を呈する。底部は回転糸切り。6は、底径 5.5 cm、の壺形土器であり底部は回転糸切りである。7は、高台付き壺形土器である。底径は 8 cm、色調は茶褐色を呈する。8は、灰釉の壺形土器である。推定底径15 cm。9は、灰釉陶器である。推定底径 9 cm。10—17は、鉄滓で茶褐色を呈する。

### 第2号住居址出土遺物（第9図）

1は、口径12 cm、器高 5 cm、底径 6 cm、内面に暗文が見られ、外面にヘラケズリが施されている。色調は内外共に赤褐色を呈する。2は、推定口径14 cm、内面に暗文が施されている。3は、内面黒色研磨、口径12 cm、器高 4 cm、底径 6 cm、底部は回転糸切りである。4は、口径 16 cm、器高 5.5 cm、底径 7 cm、内面黒色研磨の壺形土器である。5は、口径12 cm、器高4.5 cm、底径 5.5 cm、内面黒色研磨、外面に「福」の墨書きが見られる。6は、口径11.8 cm、器高4.3 cm、底径 4.8 cm、内面黒色研磨、外面に「福」の字の墨書きが見られる。7は、口径11 cm、器高 4 cm、底径 5 cm、内面黒色研磨、外面に「前洒坏」と「福」の墨書きが見られる。底部は回転糸切りである。8は、底径 7 cm、底部回転糸きり。9は、外面に「福」の墨書きが見られる。10は、底径 5 cm、底部回転糸きり。11は、推定口径15 cm、内面黒色研磨で外面の色調は茶褐色を呈する。12は、高台壺形土器の底部である。13は、蓋形土器である。14は、硬砂岩製の砥石で、長さ18 cm、幅 5 cm、厚さ 1.5 cmである。15は、凝灰岩製の砥石である。

### 第2号住居址出土遺物

第11図の1—4は第2号住居址出土の壺形土器である。1、推定口径 2.6 cm。2、推定口径 2.8 cm。3、推定口径 2.7 cm。4、推定口径 2.8 cm。

第10図は第2号住居址出土の鉄製品である。1、全長17 cm、刃部の長さ 9 cm、茎部 7.5 cmを測る刀子である。2、刃部の一部を欠失する。残存部長さ10.5 cm、茎部 6 cmを測る刀子である。3、茎先端をわずかに欠失するがほぼ完形の鉄鎌である。全長 9.5 cm、刃部幅 3 cm、を測る。4、茎部を欠失する刀子で残存長 5.5 cmを測る。5、新であり、全長 3.5 cmを測る。

### 第3号住居址出土遺物

5、口径14 cm、器高 5 cm、底径 4.5 cm、内面に暗文が施され、底部は回転糸きり後ヘラケズ

りがされている。6、口径13 cm、器高5 cm、底径6 cm、外面と底部がヘラケズリが施されている。7、口径12.4 cm、器高2.5 cm、底径4 cm、外面はナデとヘラケズリされ、底部はヘラケズリが施されている。色調は内外共に茶褐色を呈する。~8、推定口径28 cmの整形土器である。

#### 鍛治址出土遺物

1、羽口の先端に鉄が付着、孔径2.5 cm、外径8.5 cm。2、鉄の付着は見られない、孔径2.6 cm、外径9 cm、全体にもろくなっている。3、孔径2.6 cm、外径7.5 cm先端に鉄が付着。4、推定孔径2.7 cm、推定外径8 cm、先端に鉄付着。5、推定孔径3.4 cm、推定外径7 cm。6、先端に鉄付着、孔径4 cm、外径6.5 cm。7、推定孔径3 cm、推定外径8 cm、先端に鉄付着。8、推定孔径3.2 cm、推定外径8.5 cm、先端に鉄付着。9、推定孔径2.2 cm、推定外径7 cm。10、推定孔径3.5 cm、推定外径8.5 cm、先端に鉄付着。11、先端に鉄付着、推定外径7 cm。

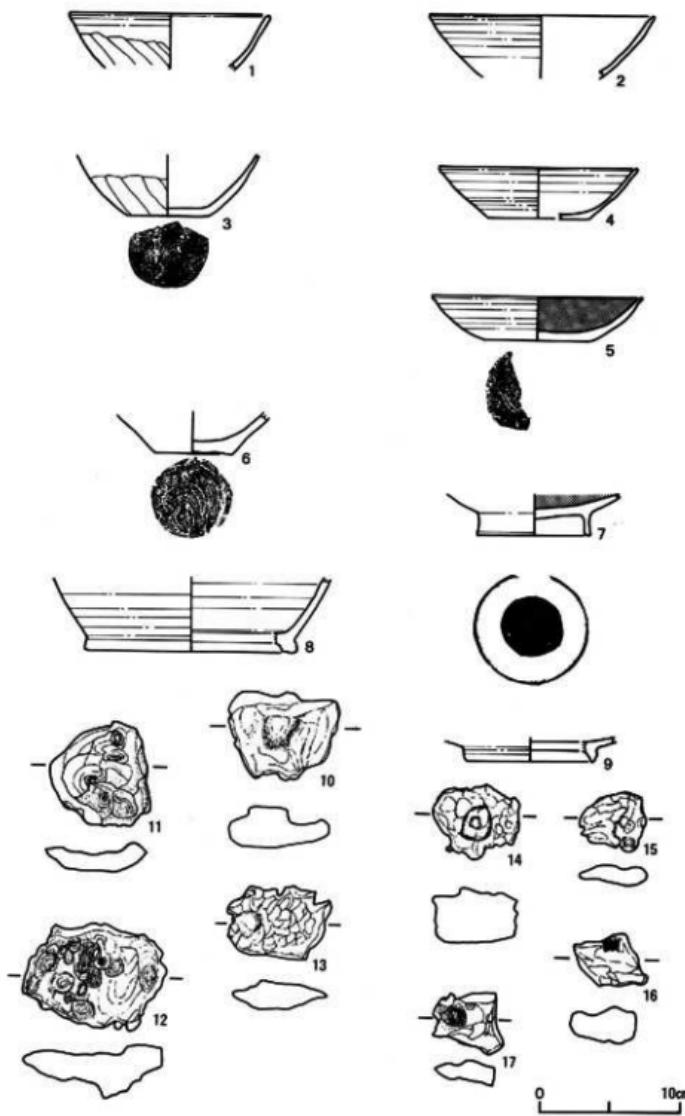
#### 鍛治址出土遺物

鍛治址より出土した鉄滓は大部分が楕円形滓で、赤褐色、茶褐色を呈し、一部の鉄滓に木炭痕が見られた。

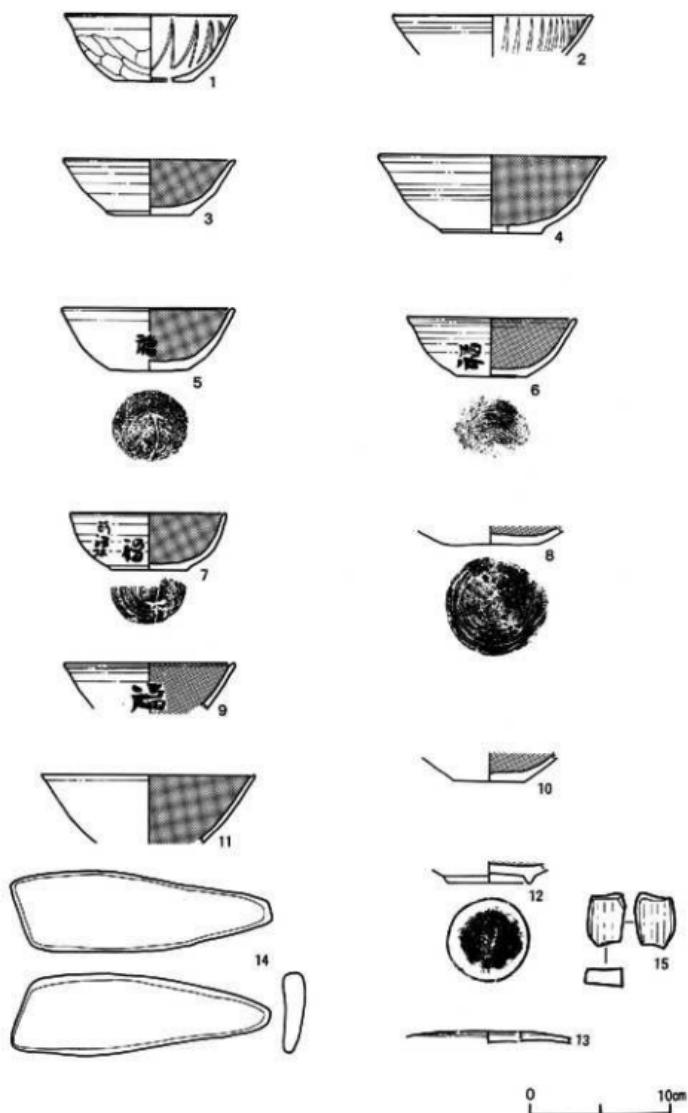
#### 鍛冶炉出土遺物

1、孔径3 cm、外径9 cm、色調は黄褐色を呈し、非常にもろい。2、推定孔径2.8 cm。3、先端に鉄付着、推定孔径2.8 cm、推定外径10.5 cm。4、推定孔径3 cm、推定外径8.5 cm、先端に鉄付着。5、推定孔径2.8 cm、推定外径7.5 cm、先端に鉄付着。6、推定孔径2.8 cm、推定外径8 cm、先端に鉄付着。

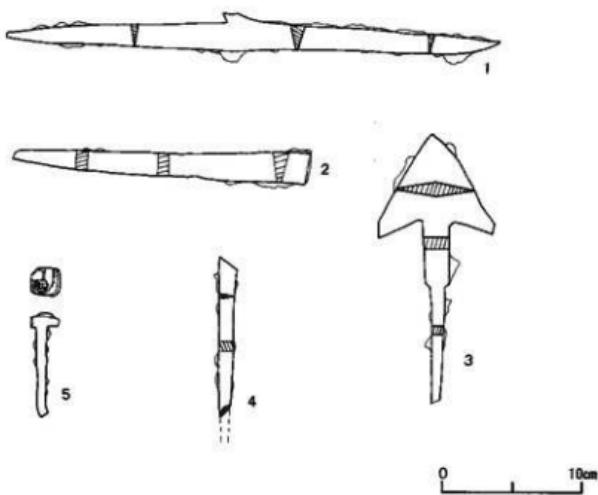
鉄滓は楕円形滓が大部分であった。



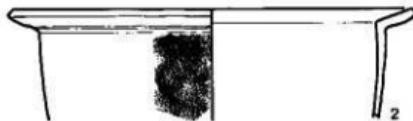
第8図 第1号住居址出土遺物



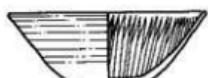
第9図 第2号住居址出土遺物



第10図 第2号住居址出土遺物



第2号住居址  
出土遺物



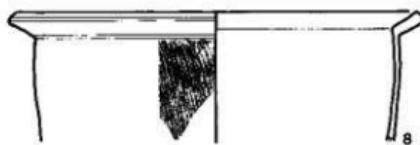
5



6

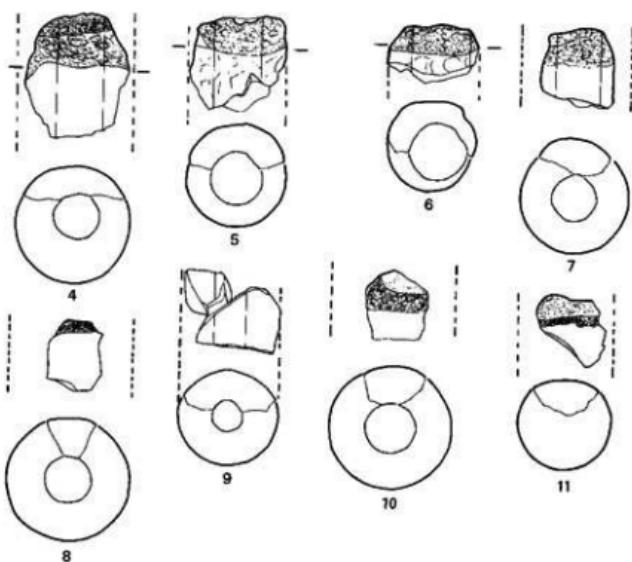
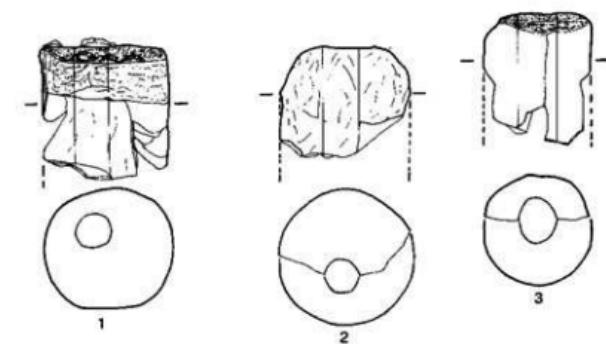


7



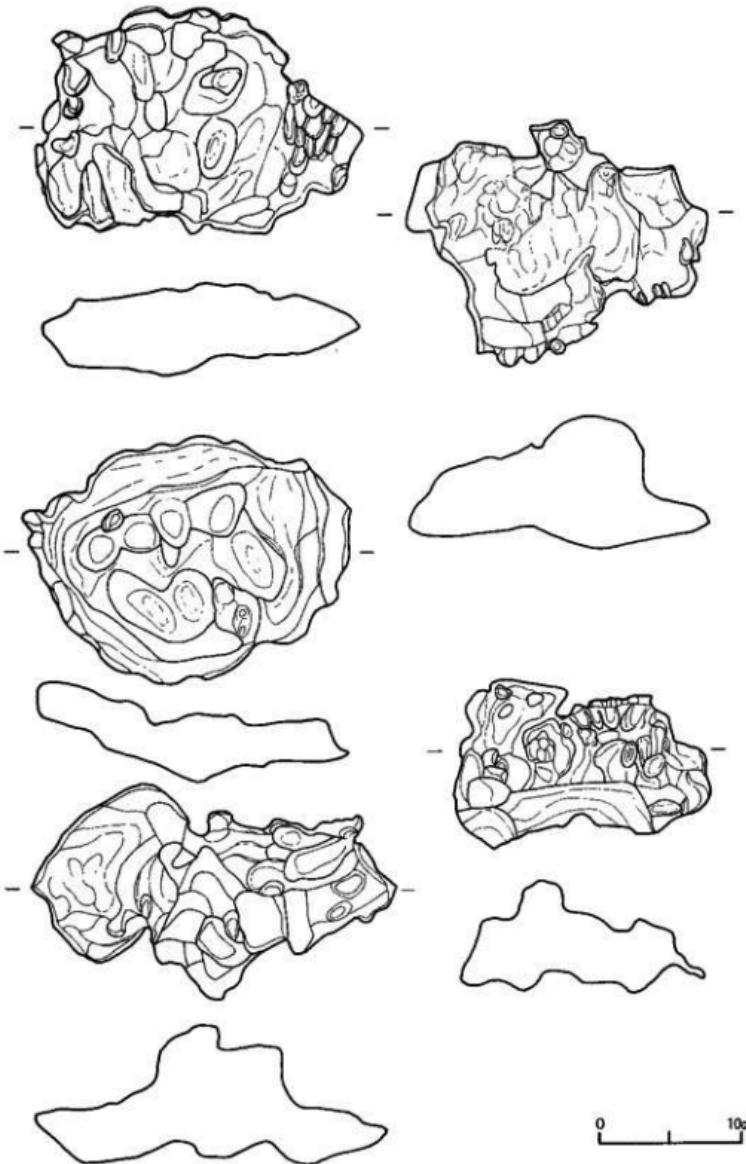
0 1 10cm

第11図 第2・3号住居址出土遺物

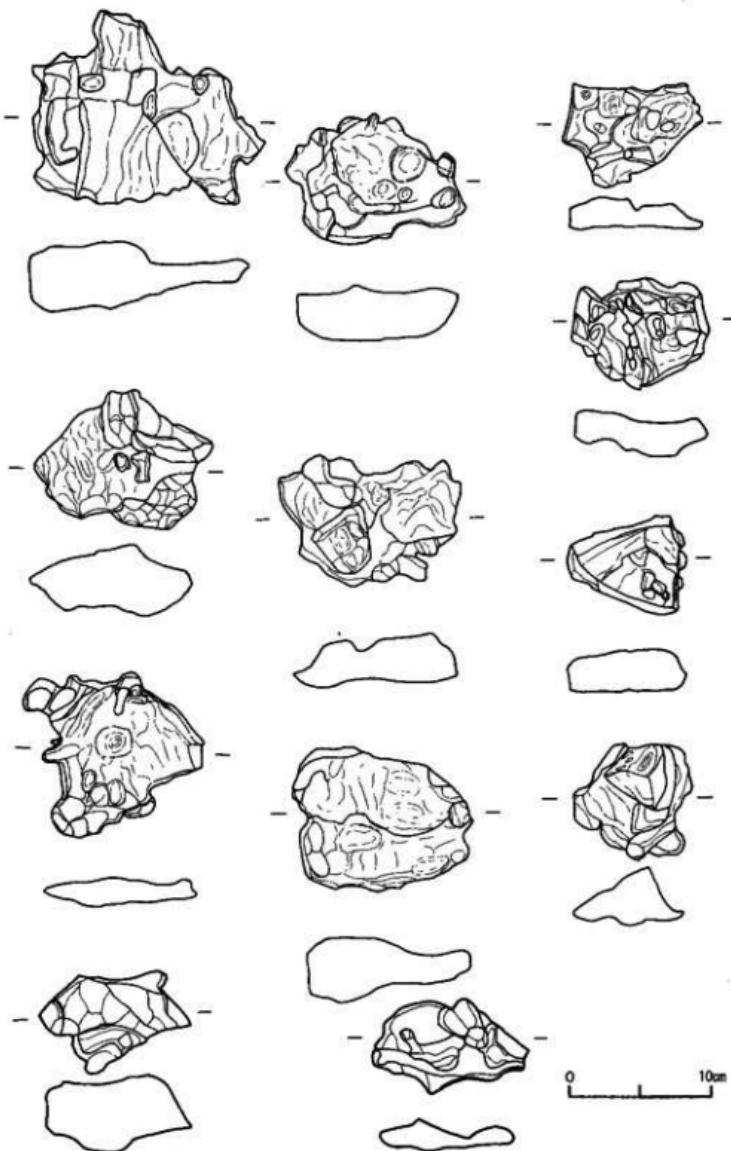


0 10cm

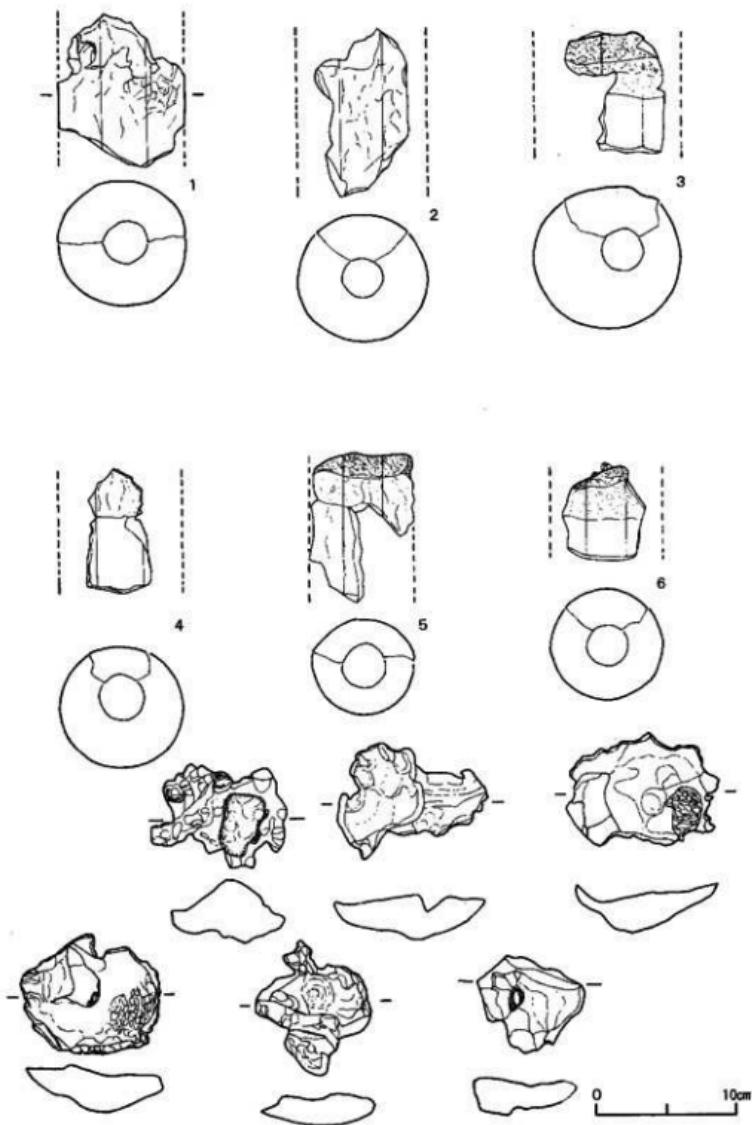
第12図 鋳治址出土遺物



第13図 銀治址出土遺物



第14図 銀治址出土遺物



第15図 鎔治炉址出土遺物

## V ま と め

竹原遺跡は、発掘調査の結果、平安時代の鍛冶を主とする遺跡であることが判明した。検出された遺構は竪穴住居址、鍛冶址、鍛冶炉址であり、遺物は土器が土師器を主として他鉄製品、羽口等である。

最後にその概要を記してまとめとしたい。

### 遺 構

#### 竪穴住居址について

住居址の形態は、検出された3軒共に隅丸方形で、規模は一辺 3.5m - 4.5mを測る。各コーナーは全体に丸味をもっている。カマドの位置は3軒共に北東壁に構築されている。これはこの地域の冬に吹く強い北風の影響かもしれない。カマドは3基共に石組に粘土とロームを使用したものである。規模としては長さ 1.5m、幅 1m前後である。柱穴は3軒のうち、第2号住居址のみ一本検出いただけであった。床面は良く踏み固められたものと、軟弱なものが見られた。周縁は2軒の住居址で検出された。

#### 鍛冶址について

鉄の生産・加工に関係する遺構は、製鉄址、大鍛冶址、小鍛冶址の3つに工程分類される。本遺跡で検出された遺構は3つのうちの小鍛冶に関係するものと考えられる。本遺跡検出の鍛冶址は2種類あり、遺構内にカマドをもつ竪穴住居址と遺構内にカマドをもたない竪穴状遺構である。竪穴住居址は第1号住居址で東西 4.3m、南北 4 mを測り、住居址内の中央に鍛冶炉を有するもので、炉の周囲には鍛造片を主とした鉄滓が集中して認められた。竪穴状遺構は長方形を呈し、遺構内には炉は検出されなかった。また、柱穴も検出されなかったが、柱を床に直接たてて柱穴を使用しない構造だったかもしれない。

#### 鍛冶炉址について

鍛冶炉址には火窓形、円形土壙形、舟底形の3種類があるが、本遺跡検出の鍛冶炉址は円形土壙形である。

### 遺 物

#### 土器について

本遺跡で土器は、土師器・坏形土器が圧倒的に多く、他の土器が稀少なため、ここでは坏形土器について触れる。

1類 内面に放射状ないし花弁状の暗文が施されている。胴部下半に横ないし斜方向にヘラケズリがみられる。色調は赤褐色をしています。

2類 1類と同様に胴部下半に横ないし斜方向のヘラケズリが施される。内面には暗文はみられない。底部はヘラケズリされる。色調は赤褐色を呈する。

3類 内面黒色研磨の土器で、底部回転糸切りされている。

1類と2類はいわゆる甲斐形土器とよばれるもので、1類と2類の違いは1類は内面に暗文があり、2類は内面に暗文がないことである。3類は北巨摩郡地域で多くみられる黒色研磨の土器である。1類、2類、3類の年代的な位置については、坂本氏等の編年によると、10世紀の第3四半期—10世紀の第4四半期に位置づけられると考えられる。

#### 墨書き土器について

本遺跡から出土した墨書き土器は、4点であった。いずれも内面黒色研磨の土師器壺形土器であり墨書きは「前酒壺」、「福」である。この墨書きの意味を考えてみると、祭祀に使用した吉祥句として書かれたものと考えられる。

#### 羽口について

羽口は輪から空気を炉に送る筒状の管である。本遺跡から出土した羽口はすべて粘土製で、いずれも造構内に廃棄された状態での出土であった。色調は茶褐色・黄褐色を呈し、先端は高温にさらされ溶融状態である。

#### 鉄滓について

鉄滓には、製鉄の段階での製鍊岸と鍛冶段階での鍛冶岸に分類される。本遺跡で出土した鉄滓はいずれも表面凹凸が激しく、大きさ10cm以上、重さ400kgを越えるものから数cmの小さなものまで多種である。大部分の鉄滓は楕円岸で鍛冶にともなう鉄滓と考えられる。

#### 参考文献

坂本美夫他1983、「シンボジウム、奈良・平安時代の諸問題—相模国と周辺地域の様相」  
『神奈川考古』第14号

#### おわりに

竹原遺跡の調査報告について、ここに報告書としてまとめる事が出来、多くの成果を得る事が出来た。本報告書がこの地域の平安時代研究の解明の一助になれば幸いである。

図

版



遺跡近影

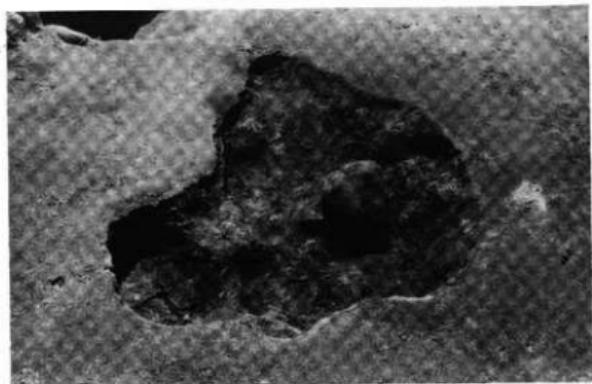




第1号住居址



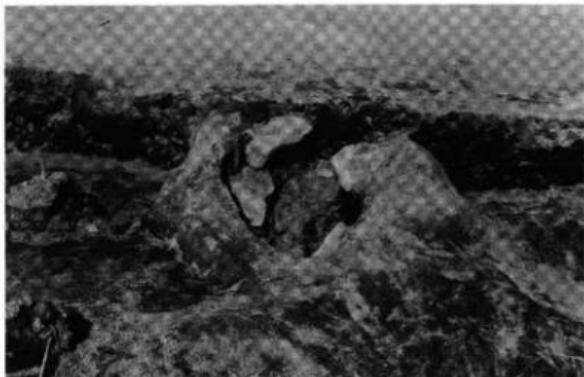
第1号住居址  
カマド



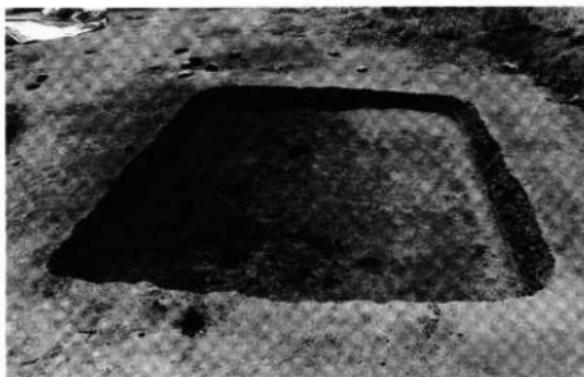
第1号住居址内  
鍛冶炉



第2号住居址



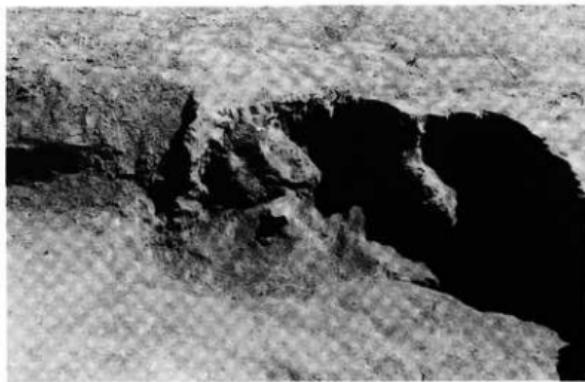
第2号住居址  
カマド

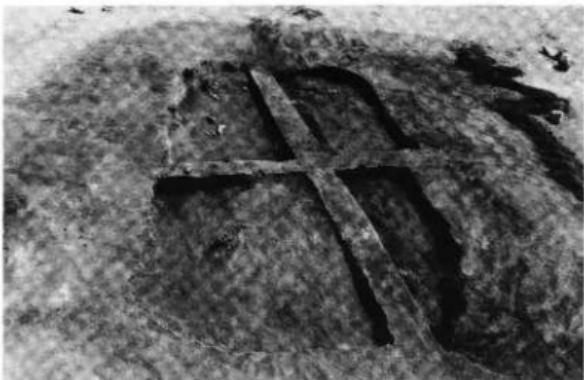


第2号住居址  
掘り方

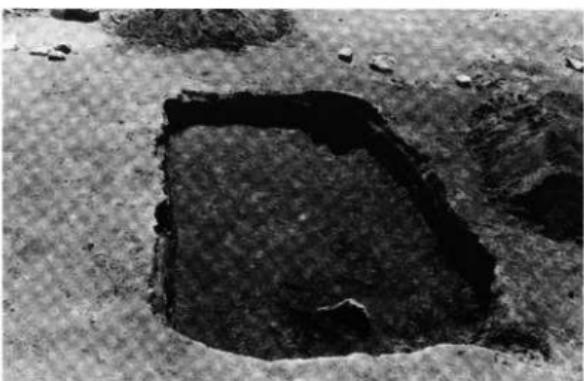


第3号住居址



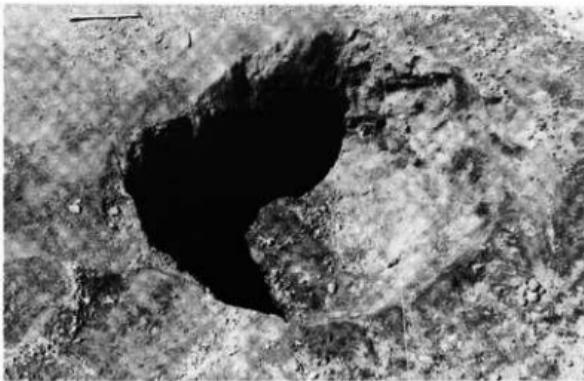


鍛治址



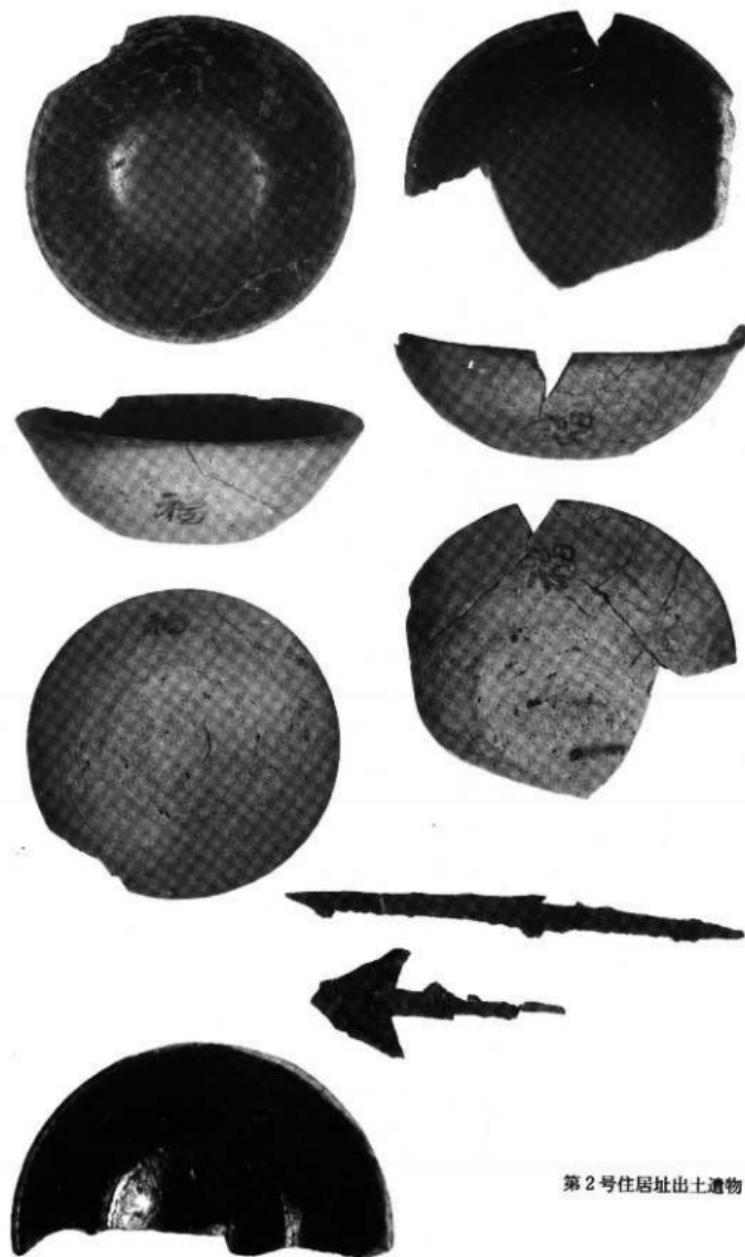


鍛治炉址

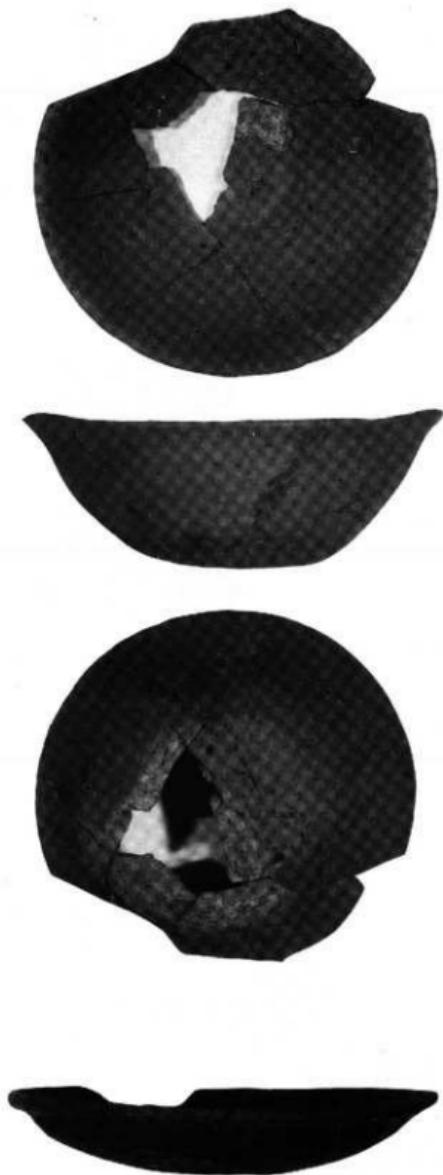




第1号住居址出土遺物



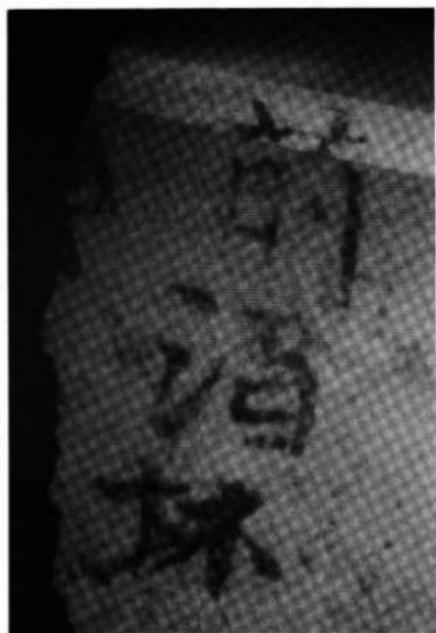
第2号住居址出土遗物



第3号住居址出土遺物



鐵治址出土遺物



墨書

## 小淵沢町竹原遺跡

〈免 行 日〉

昭和63年3月31日

〈免 行〉

小淵沢町教育委員会  
正堂町1-1(番地)小淵沢町677-1

〈印 刷〉

峠北印刷株式会社

